交差する月と太陽

てらい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
交差する月と太陽

【Ｎコード】
Ｎ４７２５Ｊ

【作者名】
てらい

【あらすじ】
とある事件に巻き込まれた少年。少年は何を思い戦い続けるのか。
という夢を見たもう一人の少年。一体その夢にはどういう意味があるのか。
それは運命のはじまりだった。

第０話　崩れ落ちる日常

『ガサガサ』
鞄の中に弁当とお茶を入れる。
「よし、行くか。」
「気をつけて行ってらっしゃい。」
「うん、行ってくるよ、ばあちゃん。」
そう言って外に出る。
今日は結構良い天気だ。
「今日も一日頑張るか！」
俺の名前は植木桃麻（うえきとうま）。どこからどう見ても、健全な１５歳の青年である。訳あって今は祖父母の家で暮らしている。
俺が生まれてすぐ両親は離婚した。その後、母親が俺を引き取り女手一つで俺を育ててくれた。しかし俺が５歳の時、母親も病気で死んでしまい、その後は孤児院で暮らしていた。そして俺が孤児院を出た後、家計の厳しい祖父母のところで暮らし、出稼ぎをして何とか生計を立てていた。

「モモちゃ～ん！おっはよ～！」
家を出てしばらくしたところに、この村のシンボルでもある噴水がある。そこで聞き慣れた声に呼び掛けられた。
「よう、おはよ。」
モモちゃんというのは俺のあだ名で、名前に「桃」という字があるからという理由だけでつけられた。せめて『ちゃん』をつけて呼ぶのはやめてほしい。
この女の子は竹谷（たけたに）かぐや。俺のあだ名を付けた張本人である。歳は俺と同じで１５歳。同じ孤児院の出身で、俺と同時期に入ったのでほとんど幼馴染のようなものである。今は一人暮らしで、農業のアルバイトをして生計を立てている。青みがかったロングヘアが特徴

的である。
「今日もお仕事？毎日偉いねぇ。」
「まぁな。そうでもしないと、結構厳しいからな。そういうお前は孤児院の手伝いか？」
「うん！もうみんな元気いっぱいで、毎日へとへとだよぉ～。」
文句を言いながらも、へへっと笑っている。
「大変そうだな。」
「まぁね。でも、みんなが成長していく姿をみると、なんだか嬉しくなっちゃって。」
正直、偉いのは俺よりもかぐやの方である。かぐやは一人暮らしで、自分の生計を立てるだけでも大変なのに、そのうえ孤児院の手伝いをしている。
俺は自分のことだけで精一杯で、孤児院のことはほったらかしである。
「じゃあね、モモちゃん。お仕事がんばって！」
「おう。」
かぐやと別れて村の出口へと向かった。

俺の仕事場は、隣町のフォースシティというところにある。このフォースシティへは、俺の村、ジルハマから徒歩で４０分ほどかかる。この４０分が正直もったいないが、それでもフォースシティで稼いだ方が利益は高いので、毎日地道に歩いて通っている。
「おはようございます！」
「よう、植木。おはよう。」
「おはよう、植木君。」
仕事場に着き一通りみんなにあいさつする。
ここでの仕事は、他の町から流れてくる物資を仕分けすることである。フォースシティはこのあたりの町の中心となっていて、町と町をつなぐパイプのような役割をしている。そのためこの物資の仕分けというのはかなり重要な仕事である。

「よし、じゃあさっそく始めるか！」
この現場の指揮官の合図とともに仕事を始める。
「こいつはそっちに運んでくれ！」
「な、で、でかい。」
いきなり俺の身長の2倍はある大物が出てきた。ここでは大物から小物まで様々なものが出てくるが、ここまで大きいのは久々であった。
「せーのっ！」
気合いを入れて持ち上げる。
「くっ、はぁ、でりゃ～！」
「おーおー、よくそんなでっかいもん一人で運べたな。俺たちおっさんには無理だぜ。」
とか言っているが、実は自分たちが持ちたくないだけである。

「よ～し、じゃあ今から1時間休憩！」
「はぁ、はぁ、はぁ。」
今日はやけに大物が多く、午前中にかなり力を使い果たしてしまった。
持ってきていた弁当を開ける。
「いただきます。お、肉じゃがが入ってる。」
祖母の作る料理はどれも美味しいが、一番は肉じゃがである。
「ん～うまい！」
いつ食べても美味しいが、これだけ疲れた後に食べるとさらに美味しくなる。
「おつかれさま、桃麻君。」
そう言ってお茶を出してくれたのは、この会社の社長の娘、つまり社長令嬢の戌井優花（いぬいゆうか）であった。この子は俺より一つ年上の１６歳で、よく俺たちの世話をしてくれる。
「お、ありがとう。優花ちゃん。今日は学校休みなのか？」
「うん、というか、今日は午前中で終わり。」

この町には学校というところがあり、俺くらいの年の奴はだいたいそこに通っているらしい。そこで学ぶものは魔法である。正確には超能力というのだが、いまいちその能力については理解ができない。誰しもこの超能力というものは持っていて、コツさえつかめば誰でも使えるらしい。しかしこのコツというものをつかむまでがかなり難しいらしく、学校へ通っている人でも半分くらいしか使えないらしい。

「あ、そこ、怪我してる。」

優花ちゃんにそう言われて腕をみると、手の甲から血がでていた。

「あ、ほんとだ。まぁこのくらいほっとけば治るよ。」

「だめだめ。そういうのが命取りになるんだから。」

「命取りって・・・。」

「まぁまぁ、こういうときのための私の能力なんだから。いま使わないでいつ使うのよ。」

そう言って傷口に手を当てた。すると見る見るうちに傷がふさがっていった。

これが優花ちゃんの使う超能力、いわゆる治癒術である。この治癒術は他の超能力と少し違うらしく、使える人はかなり少ないらしい。

「はい、終わり。」

「いつみてもすごい力だな。」

傷口を一瞬でふさぐ力なんて、最初に見たときは普通に驚いた。

「そうかな?」

少し笑って、真剣な口調で話し始めた。

「この力があれば医療機関が近くにないところでも、助けられない命を助けることができるかもしれない。私、初めてこの力が使えるようになったとき思ったんだ。これは私にしかできないこと、私がやらなくちゃダメなんだって。私がみんなを助けるんだって。っていっても、私の力じゃまだ応急処置くらいしかできないけど。」

「優花ちゃんなら大丈夫だよ。優花ちゃんなら、もっとたくさんの人を救えるようになれるよ。」

「へへ、ありがと。じゃあそのためにも、もっともっと頑張って勉強しなくちゃね！」
「あぁ、頑張れよ！ってもうこんな時間か！？」
いつの間にか作業開始5分前になっていた。
「あ、ホントだ。」
急いで残っていたご飯をかき込む。
「よし、じゃあ行ってくるよ。」
「うん、頑張ってね。」
そう言って現場に戻った。

「お疲れ様でした！」
「おう、お疲れ。また明日な。」
「おつかれ。」
今日1日のノルマを終えた頃には、すでに夜になっていた。
「つ、疲れた・・・。」
今日はやけに大物が多かった。
「おっさんたちも、もう少し手伝ってくれよなぁ。」
「お疲れ。今日は大変だったみたいだね。」
そんな愚痴をこぼしていると、後ろから優花ちゃんに声をかけられた。
「大変なんてもんじゃないよ。優花ちゃんからも、あの人たちに言っといてくれよ。」
社長の娘から直々に言われたら、さすがのあの人たちももう少しは働いてくれるだろう。
「りょ～かい。ちゃんと言っとくね。」
優花ちゃんは快く引き受けてくれた。
「そういえば、かぐやちゃんは元気？」
と聞いてきた。実は優花ちゃんとかぐやは友達なのである。
「もう、元気も元気。有り余って迷惑してるくらいだ。」
優花ちゃんは時々うちの村へ遊びに来ることがある。初めて来たと

きは、仕事で少し寄っただけだったのだが、その時にかぐやと意気投合しそれ以来ちょくちょく遊びに来るのである。
「そっか、よかった。その様子じゃ、上手くいってるみたいだねぇ～。」
と含み笑いをする優花ちゃん。
「なっ、なに言ってるんだよ！」
顔が燃えるように熱い。
「ふふ、じょうだん、じょうだん。でも顔が真っ赤になってるってことは・・・。」
「だー！もういいって！」
優花ちゃんの言葉をさえぎる。
「ふふふ、じゃあ、明日は休みだからそっちに行くね。」
「ったく・・・。あぁ、かぐやに伝えておくよ。」
「うん。じゃあね。」
バイバイと手を振る。
「おう。」
優花ちゃんと別れ、ジルハマへと向かった。

「今日はあんまり星が見えないな。」
帰り道で空を見上げると、黒い雲が空を覆っていた。
「今夜は雨でも降るか？」
そんな独り言を言っていると、村の方がやけに明るいことに気が付いた。
「なんだ？今日ってなんかあったかな？」
と少し思い出してみるが、別に特別な日でも何でもない。
少し胸のあたりがチクリとした。
「なんだか嫌な予感がする。」
こういうときの感はあまり当たらないが、それでも自然に足が速くなる。

村に着くころには、ポツリポツリと雨が降ってきていた。
「はぁはぁはぁ、なんだよこれ・・・。」
目の前には信じられない景色が広がっていた。
この村にあるすべての家が、畑が、協会が、孤児院が、燃えさかる炎に包まれていた。ほとんど原形を残していない建物や、焼け落ちた家もある。
「どうなってるんだよ・・・。」
目の前の出来事があまりに衝撃的で、訳が分からなくなってきた。
ふらつく足を必死に動かして、自分の家へと向かう。
「な・・・！。」
自分の家に着いた俺は愕然とした。そこにあるはずの家が無くなっていた。玄関も、居間も、台所も、俺の部屋も、じいちゃんとばあちゃんの部屋も、全てが炎に包まれ無くなっていた。
俺はその場に膝から崩れ落ちた。
「じいちゃん・・・ばあちゃん・・・。」
何も考えることができなかった。まるで思考という機能が失われたかのように。

雨はすでに大粒になり、炎を少しずつ弱めていた。
俺はしばらくそこから動くことができなかった。
「・・・・・。」
誰かの声が聞こえる。
「・・・・・。」
この声が、考えるという機能を少しずつ呼び戻す。
「モモちゃん・・・。」
かすかにかぐやの声が聞こえた気がした。
「かぐや・・・！」
ガバッと立ち上がり辺りを見回す。しかしその声の主は見当たらない。
まだ完全に使うことのできない頭で必死に考える。

「そうだ・・・孤児院・・・！」
ほとんど言うことの利かない足を必死に動かし、孤児院へと向かう。

「はぁはぁはぁ。」
孤児院はまだ何とか原形を保っていた。
『ガチャガチャ』
「くそ！何で開かないんだよ！」
『ガチャガチャ』
「はぁ！」
『ズドォン！』
開かなくなった扉をけり倒す。
「かぐや！どこだ、かぐや！」
見わたす限り誰もいない。
一つ一つ部屋を調べていく。
最後に一番奥にある扉を開けた。そこにかぐやはいた。
「かぐや！」
かぐやのもとへ駆けつける。
かぐやは子供たちを守るように覆いかぶさっている。しかし子供たちからは生気を感じない。
「モモちゃん・・・？」
「かぐや！おい、大丈夫か！しっかりしろ！」
かぐやの服からは大量の血がにじみ出ていた。
「ごめん、モモちゃん、私、みんなを、守れなかった・・・。」
かぐやの体は氷のように冷え切っていた。俺はギュッとかぐやを抱きしめる。
「私も、もう、死んじゃうよね？あぁ、私、もっと、生きたかったな・・・。モモちゃんと結婚して、たくさん子供つくって、そして、お爺ちゃんと、お婆ちゃんになるまで、ずっと・・・。」
俺はただただ頷くことしかできなかった。
「ねぇ、私の、最期のお願い、聞いてくれる？」

「あぁ、何だ？」
そう言うと、かぐやはスッと目を閉じた。
俺はそれにこたえるように、かぐやの唇にキスをする。
「モモちゃんの唇、ザラザラ。そんなんじゃ、女の子に、嫌われるよ。」
へへっと笑いながら、かぐやは言った。
「モモちゃん、私、怖いよ。死にたく、ないよ。」
今まで耐えてきた恐怖がこみあげ声が震える。
ほとんど力が入らないであろうかぐやの手が、俺の腕をギュッと握った。
「大丈夫だ、かぐや。俺がずっとそばにいる。いつまでも、どんな時でも、ずっと・・・。」
俺もかぐやの手をギュッと握る。
「へへ、ありが、とう。最期に、モモちゃんに、会えて、よかっ、た・・・。」
最期にそう言って、かぐやは目を閉じた。
「かぐや・・・かぐやぁ！。う、あ、あああぁ、あああああぁぁぁぁ・・・。」
声にならない叫び声が、部屋の中にいつまでもいつまでも響きつづけた。

第０話　崩れ落ちる日常（後書き）

まだ連載中の作品があるのに書いてしまいました。
とりあえずプロローグだけでも書いておこうと思い投稿しました。
魔法（超能力）で敵を倒していく王道のような物語だと思われます
（おい！
次はいつ投稿するかわかりませんが、その時はまた読んでいってくれるとうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4725j/

交差する月と太陽

2011年1月16日05時01分発行